専門家が情報共有を

被ばくの母失った女性医師

ベラルーシから 秋田と交流20年 ■□2

「震災では、兄のような佐々木さんや秋田の友人はもちろん、日本のみなさんのことが心配でたまらなかった」

◇

ベラルーシ医科大病院の医師、ナターリャ・P・ミトコフスカヤさん(52)は柔和な表情を曇らせ、青い瞳の奥には悲しみが宿った。秋田市のNPO法人、日本ベラルーシ友好協会の事業で95年に3カ月間、秋田に滞在したミトコフスカヤさん。その後も同協会事務局長の佐々木正光さん(62)とは家族ぐるみで付き合ってきた。秋田では佐々木さんが畑でとれた野菜でもてなし、ベラルーシではミトコフスカヤさんがダーチャ(郊外の別荘)に招待し、郷土料理を振る舞った。

◇

ミトコフスカヤさんの母親は元内科医だった。86年のチェルノブイリ原発事故後、志願してウクライナに入り、被ばく者の看護にあたった。

ミトコフスカヤさんは「父は物理学の専門家で、私の家族はいかに原発事故が大変なことか理解していた。それでも、被ばく者を助けるという母の決意は固かった」と話す。

その後、ミトコフスカヤさんの母親は成人性白血病にかかった。佐々木さんが見舞いに訪れたときには、病気で髪の毛が抜け、眉毛もない状態だった。それでも、ミトコフスカヤさんの母親は「チェルノブイリ事故で被ばく者を看護したことも、被ばくして死ぬことも、娘は納得しているはず。娘は秋田に行ったおかげもあって、医師としての道を進めてきている。自分にとっても幸せだ」と語ったという。

佐々木さんは「お母さんは02年に亡くなったが、あの言葉は今でも鮮明に覚えている。私にとって、大きな励みになった」と話す。

◇

ミトコフスカヤさんは95年5~7月、3人の仲間と共に来日。秋田市の秋田大医療技術短大学部で3カ月間研修した。学んだ知識や技術をベラルーシでの医療活動に生かすとともに、ベラルーシから秋田へ派遣する医師の選抜にも関わっている。

ミトコフスカヤさんは「秋田ですばらしい医師に知り合えた。今も心の底から感謝している」と言う。佐々木さんは「仕事には厳しく、妥協しない人」と高く評価する。

日本ベラルーシ友好協会は秋田大医学部などの協力を得て、92年から昨年までに69人の医師を県内へ招待、研修などを実施してきた。中には後にベラルーシ医科大学長を務めた人もいるなど、最前線で活躍している。

「放射線の影響は何年後に出るか分からない。物資の支援だけでなく、若い医師を含めて少しでも人材育成を支援できれば、と考えた」と佐々木さんは話す。

ミトコフスカヤさんは福島第1原発事故の後、ベラルーシと日本の専門家が情報を共有する必要性を感じ、来春に国際シンポジウムを企画。秋田大を含め日本の医師らも招待し、「放射線の健康への影響」をテーマに意見交換を行う予定だ。

「私は医師なので日本と科学の面で協力していきたい。ベラルーシと日本は距離が離れているが、ともに研究を進めることができるはずだ」

【小林洋子】

=つづく

ミトコフスカヤ医師(中央奥)と佐々木さん(中央下)=ベラルーシのミンスクで

「放射線と健康」国際シンポ企画

放射線被ばく

人体の場合、外側から放射線を受けることを外部被ばく、放射性物質が口や皮膚などから体内に入り、臓器や組織が放射線を浴びることを内部被ばくと呼ぶ。短時間に大量の放射線を浴びると、脱毛や出血など急性障害が出る。低線量被ばくでは、発がんリスクの高まりが懸念されるが、線量100ミリシーベルト以下の場合はリスクの検証は難しいとされる。チェルノブイリ原発事故では4~5年後から子どもの甲状腺がんが急増、IAEA(国際原子力機関)などが被ばくの影響と認めている。

ノウハウを福島のために

放射線研究所設立に尽力の医師

ベラルーシから 秋田と交流20年 ■□1

秋田市のNPO法人、日本ベラルーシ友好協会(西木正明理事長)が、チェルノブイリ原発事故(86年)で被曝を受けたベラルーシの医療支援を始めて今年で20年になる。医療支援物資を届けたり、秋田大医学部などの協力で同国の医師を県内の病院で研修したりしてきた。福島第1原発事故を受け、ベラルーシの医師らは「これまで培ってきたノウハウを福島のため、日本のために生かしたい」という思いを強くしている。同協会もベラルーシの思いをくみ、20年間かけて築き上げた関係を生かした支援に向けて動き始めた。同協会の7月下旬のベラルーシ訪問に同行取材した。【小林洋子】

「ササキ!」ベラルーシに来てたのか。再会できて、すごくうれしいよ」

ウラジミール・S・ボロベイさん(63)は声を弾ませ、大きく手を広げて出迎えた。ボロベイさんは、ベラルーシ南部のゴメリ州にある国立放射線生態医学研究所の設立に携わった内科医。同国の保健省健康管理特別行動部長を務めている。

「ササキ」は、日本ベラルーシ友好協会顧問で長・佐々木正光さん(62)。ボロベイさんとは20年来、兄弟のように付き合ってきた。この日は10年ぶりの再会。2人は抱き合って喜んだ。「どうしているのかと思った」。冗談も交じり、話はつきなかった。

佐々木さんは91年から50回近くベラルーシに通い、チェルノブイリ原発事故について語り始めた。

86年4月26日、現ウクライナにあるチェルノブイリ原発で爆発事故が起き、旧ソ連地域に広がった放射性物質の7割近くがベラルーシに降り注いだ。国土の4分の1が汚染された。

事故の全容がわからない中、ボロベイさんは医師として5月にゴメリ州ホイニキ地区に派遣された。ボロベイさんは住民に避難を命じた。「当時、事故の重大さを分かっている人はほとんどいなかった」。住民は財布とパスポート以外の荷物はほとんど持てずに突然出て行けと言われ、「パニック状態だった」と語る。

やがて放射線被害の深刻さが明らかになり、避難した住民の惨状を直接見たことで、ボロベイさんは「何とかしなければ」と研究所設立に向けて動き出した。「僕と亡くなった部下のジェルゼンスキーが、ゴメリに放射線や被ばくの研究や診断ができる研究所を作るアイデアを考えたんだ」と胸を張る。

だが、91年の旧ソ連崩壊や支援する各国の思惑などから、センター建設が始まったのは93年だった。佐々木さんは設立までの様子を「彼の部屋に行くと、机の上に模型があって、ここにはこれを作って、ここにはお前も泊まれるホテルを作ると構想を次々に話していた」と振り返る。

同協会は研究所の前身のゴメリ州立病院に対し、検査機などを備えた巡回診断車を送ったり、検査の試薬を送るなどして支援してきた。いずれもボロベイさんから要望を聞いた上での支援。佐々木さんは「彼の周囲にも支援は山のようにきていたが、彼らが何を必要としているのかを聞いた上での支援は少なかったようだ」と話す。

◇

02年、事故から16年後にようやく完成した研究所。ベラルーシ人の治療とともに、国際的なレベルでの放射線研究という当初の目的は「9割近く達成した」とボロベイさん。一方で「多くの健康被害が出たが、放射線による影響が具体的にどのようなものだったのかは、今も分からない部分が多い」と打ち明ける。

佐々木さんは「日本では原発事故は起きないと思われていた。私たちもチェルノブイリに学んでいなかった」と言う。ボロベイさんは「我々にはこれまでに得た知識がある。できる限りのサポートをしたいという気持ちで胸がいっぱいだ」と力強く応えた。 =つづく

10年ぶりの再会を果たし近況を語り合うボロベイさん(右)と佐々木さん=ベラルーシの国立放射線生態医学研究所で

ベラルーシ

人口約950万人、国積20万7600平方キロ。91年に旧ソ連から独立を宣言した。旧称は白ロシア。86年4月26日、隣国のウクライナ・チェルノブイリで原発が爆発。国土の4分の1が放射性物質に汚染された。事故後30年間の経済損失額は2350億ドル(85年の国家予算32年分に相当)と試算されている。事故では1平方キロ当たり1480キロベクレル以上の高濃度地域が、原発から半径30キロ圏内と北東160~250キロに分布した。